

武蔵野市これからの地域コミュニティ検討委員会
第2回委員会 議事要旨

日時：平成25年10月15日（月）午後6:30～8:30

場所：かたらいの道市民スペース 会議室

1. 開会

2. 議事

（委員よりアンケートデータの2次分析に関する追加資料の配付）

（1）第1回議事録の確認

■事務局

- ・議事録については事前に各委員にお配りし、頂いた修正点については反映している。追加で修正があれば今週末までにご連絡いただきたい。こののち、公表としたい。
- ・また、第1回委員会の傍聴者からの意見提出もなされているのでご参照頂きたい。

■委員長

- ・議事録については各自ご確認頂きたい。
- ・傍聴者意見についても時間があれば是非検討したいと思うが、ひとまずお目通しいただきたい。

（2）コミュニティセンター視察・意見交換会について

（資料2の説明）

■委員長

- ・本日は9月29日（日）に実施したコミセン視察・意見交換会の感想の共有と、第1回委員会でお示しした論点1及び2について検討したい。これを踏まえ、次回委員会では論点をさらに展開したい。
- ・まずは、コミセン視察・意見交換会について、実際に視察をした結果、お持ちの印象や意見も委員によって非常に多様であると思われるので、改めて感じたこと等を出し合うことから始めたい。
- ・そのうえでコミュニティの定義や、運営委員会が果たすべき役割について議論できるとよいと考えている。

■委員

- ・3コミセンごとに特徴が出ていた。
- ・境南コミセンは、コミセン活動を開始して間もない者の立場からすると、初期の設立理念が30年間そのまま継続されて、盤石な運営をしているように感じた。地域の26団体がしっかりとコミセン運営に取り込まれている印象である。また、高齢者が体育館で生き生きと活動している様子や運営委員と和気あいあいと話合っているなど、和やかな

雰囲気がある。子どもの出入りも多く、非常に多様な世代に親しまれ健全な印象を受けたが、一方で活動の独自性をどのように出していくかは難しさを感じた。

- ・八幡町コミセンについては、変化が著しく他のコミセンと比較して新しさを感じた。スペース等の配置についても、地域における子育てを中心に館のあり方も利用方法も考えられており、キッズコーナーをメインに設置したり、掘りごたつのある和室が設置されていたりしていた。2階については、それぞれの部屋は狭いが仕切りを取り払えば、オープンスペースになり、地域の人が集まり、パーティのできる空間になっている。これからの運営の核となる若い人たちの活躍が期待できると感じた。
- ・御殿山コミセンについては、この地域には町内会が残っているが、戦前そのままという印象である。若者や子どもが利用しないという話が出ていたように、子どもや若者の出入りがほぼなく、高齢者中心に運営されているコミセンの1つの弊害を感じた。高齢者と若者の意見を交換する機会を設けた方が良いと感じた。

■委員

- ・御殿山コミセンについては、利用者の大半が他地域の在住者ということで、今後は地域のための施設にしていくことが重要であると感じた。
- ・八幡町コミセンについては、狭い印象はぬぐえない。委員の指摘の通り、確かに壁を取り払えばオープンスペースとして活用しやすくなると感じた。
- ・八幡町4丁目から3丁目に移ったことで、移転先の地域との関係がうまく構築できており、若い世代を取り込んで、新しくゼロから始めようという心意気を感じた。
- ・境南コミセンについては、各団体が運営に参加し、非常にうまく運営していると感じた。一方で、民生委員が各地域団体に所属することを推奨しているように、コミセンの構成員についてもある程度は行政の指導が必要と感じた。

■委員

- ・3箇所共通して「ボランティア」という言葉が出ていた。特に境南コミセンでは、「武蔵野市のコミュニティセンターは地域のボランティアが運営している」ことが窓口に掲示されていたが、どのような経緯でこうした掲示がなされたのだろうか。また、素朴な疑問として「ボランティア」とは何かということも気にかかる。おそらく市民によって捉え方は千差万別だろうが、無償のものとして捉えられた「ボランティア」が有償化への流れをたどるなかで、「市民ボランティアが運営する」ことの意味合いを行政側がどのように捉え、今後どのようにしていきたいと考えているかについても知りたいと思う。

■委員長

- ・今の議論については、論点にも関係するので今後議論したいが、ひとまず掲示の経緯について事務局から紹介できるか。あるいは紹介できる委員はいますか。

■委員

- ・この掲示は平成17年頃からのもので、当時コミセン利用者が、窓口担当者を行政の職員と誤解し、行政にもかかわらずこういうことも知らないのかといった苦情が増加したこ

とを受け、住民が自発的にコミュニティに関わろうと思って参加していることを広く知ってもらふことを目的として、コミュニティ研究連絡会で議題として取り上げ、コミセン参加者の希望として掲示した経緯がある。

- ・ 掲示の有無や掲示の方法については各コミセンの自主判断である。

■ 委員

- ・ 窓口業務と運営委員を兼ねていることが強調されていたが、時給が支払われる窓口業務と運営委員との違いがいまひとつ不明瞭である。今後、整理が必要と感じた。
- ・ また、管理運営にはそれだけの責任が伴うが、その責任を誰がどのようにチェックするのだろうか。市の評価委員会がどの程度機能しているのかについても知りたい。

■ 委員長

- ・ 後半のご指摘については、指定管理者制度を導入しチェックを受けており、評価委員会は別の役割であると思う。
- ・ 前半のご指摘について、運営委員が窓口業務をするということを、各コミュニティ協議会は強調している。これについては、ボランティアであることも含めて解説したい。
- ・ 当時、一般の公共施設と認識して利用する人が増加し、コミセンとコミュニティ協議会の趣旨や目的が理解されずトラブルになる例が多くあった。あくまでも地域住民がボランティアとして管理し、その管理業務を媒介として地域とつながっていくことを大切にしようという目的があり、そのために、運営委員が直接窓口立ち地域のことを把握しながらコミュニティを形成しようと努めたもので、これは武蔵野市が重視してきた非常に重要な点である。
- ・ 問題はそのことを地域住民がどの程度理解しているかということである。前回の議論でも、運営委員は大変な努力をしているにもかかわらず、知らない住民が非常に多く、空回りしてしまっているとの指摘があり、課題はますます大きくなっている。私個人としては、そうした掲示が行われることで、地域住民への意識の浸透を図る工夫として、好意的にみていた。

■ 副委員長

- ・ 16 コミセンで様々に違いがあり特徴がある。それはそれで素晴らしいことで、他市の公民館制度とは大きく異なる点と考えている。コミセンがコミュニティづくりの最先端を担っていることをご理解頂ければと思う。東日本大震災時にも、コミセンに来て安心感を得るといった人が非常に多かったように、単なる受付業務だけではなく地域防災計画において位置づけられた地域の相談業務という役割こそが重要である。
- ・ 境南コミセンは評価が良いがデメリットがないわけではない。例えば、ある団体の利益代表となったりしてしまうなど全体のバランスを欠くケースや、大きな変化をしようとする際の抵抗勢力や既得権益化してしまうことも危惧される。もっとスマートなやり方もあるかもしれない。

■委員

- ・境南コミセンと八幡町コミセンは大きく異なると思う。境南コミセンは非常に安定性があるのに対し、八幡町コミセンはラディカルに変化できるという面を持っている。
- ・これは、どちらかがいいということではない。例えば、八幡町コミセンが子育て世代に寄ったことは、個人的に親近感がわくが、視点を変えれば利用しづらくなった人もいるということである。
- ・一方、境南コミセンと御殿山コミセンは類似しているようにみえる。しかし、御殿山コミセンは変革に結びつかなかっただろうと思う。
- ・安定性があることは必須で、その中でどのように地域の情報が変わる中で、イノベーションを組み込むという観点で、八幡町がいい例になるかどうかを考えたい。
- ・また、防災についての新しい役割については、どこも戸惑いとして受け止めているように感じた。この点をどのように感じるかが重要であるように思う。
- ・御殿山は自分たちで避難訓練を始めていたということであり、強みになるかもしれない。
- ・防災はどこでも違っていいとはいいがたいテーマであるので、その共通性を自主三原則の中にどのように組み込むかが重要だと思う。

■委員長

- ・境南コミセンの運営方法は武蔵野市の中では珍しい例である。以前からの印象では、運営委員がやや高慢な印象があったが、今回視察でかなり変わったという印象を受けた。

■委員

- ・境南コミセンも御殿山コミセンも長い歴史の中で非常によくやっているが、利用者の若さやコミセン内の明るさという点では物足りなさを感じた。
- ・コミュニティは人と人とをつないでいくものであるので、多様な人の利用のうえに成り立つべきと考えている。
- ・また、境南コミセンのように運営者が組織の代表者で、随時人が入れ替わってしまう状況では、腰を据えたまちづくりを行うことは難しい様な気がする。けやきコミセンでも、その点を踏まえ運営は個人参加という方向になっている。
- ・八幡町コミセンについては、今後も期待をしたいと考えている。

■委員

- ・コミセンによって規模の違いが生じた要因はなにか。
- ・防災は今後非常に重要な論点になると考えている。

■事務局

- ・昭和46年にコミュニティ構想が示された時点で8つのコミュニティ地区があり、規模も同程度であったが、その後コミセンを整備する段階で、土地取得の関係で規模の制約があること、まちづくり運動（クリーンセンター建設や近鉄百貨店裏の環境浄化等）のなかでコミュニティが分割される、あるいは地域の要望から新たなコミュニティ地区が増えるといったことがあり、規模も多様化した。

- ・武蔵野市の特徴としても、市が主導的に計画するのではなく、地域の中に万遍なくあることが優先されてきた。

■委員長

- ・武蔵野市の場合、他の自治体のようにトップダウンで整備してきたものではない。整備できる地域に、地域の事情に配慮しながらつくってきた経緯がある。
- ・この点、通常の施設整備とは異なるものとして考える必要があるだろう。

■副委員長

- ・地域防災計画の修正案検討専門委員会にも委員として出席していた。地域防災計画において、コミセンは避難所運営組織の一部として位置づけられている。
- ・発災後、各地域の学校体育館等が避難所となり、コミセンは「災害時地域支え合いステーション」として、情報拠点、在宅避難継続のための必要物資の中継供給地となることが想定されていることから、コミセンの規模は関係ないものと考えている。

■委員

- ・境南コミセンは、運営委員の選出方法を変えたこと、八幡町コミセンは建替えがそれぞれターニングポイントとなっており、御殿山コミセンは災害対応等の新たな機能の付加によって変化が生じるのではないかと感じた。

■委員

- ・八幡町コミセンに関わり始めてまだ2年目であるが、境南コミセンの各団体代表が運営委員に入っていること、役割分担を明確にしていずれかの役割に必ず運営委員の誰かが入っていることで、運営はスムーズに行われているだろうと感じた。
- ・御殿山コミセンでは高齢化についてはどうしようもないという意見が出たが、八幡町コミセンのように変わらざるを得ない状況になれば、新しい人が入りやすくもなるのだろう。
- ・境南コミセンのように、各団体が地域の中で集える場があることは非常に重要である。団体について、また地域について考えることはそれぞれ重要であり、団体をつながりを保ちつつ、地域のことを考えるという役割分担はあってもいいと思う。
- ・八幡町コミセンもPTAから当て職で運営委員に入っているが、その後地域に関わるという点から運営委員になった人もいる。

(3) 論点1・2について意見交換

■委員長

- ・コミュニティの定義についての議論は難しいが、コミセンがこういう場になると良い等、コミセンの今後のあり方については色々な発想ができると思う。また、長らく携わってきた人、最近携わって思うこと、それぞれの立場でのご意見があるだろう。まずは、コミセン活動に関わる中で、武蔵野市のこれからの地域コミュニティはどのようにあるべきかについてご議論頂きたい。またそのためにコミュニティ協議会がどのような役割を

果たすべきかについてもお話し頂きたい。

■委員

- ・ これまでは「館を貸すこと」を中心に始まり、ルールもそれに準じたものになっていたが、コミュニティ条例ができ、地域のコミュニティづくりに力を入れる必要が出てきてからは、運営委員が中心になって人と人をつなげていくという意識になった。コミセンをどう使うかというよりは、利用者同士をどうつなぐかを考えるという方向になり、窓口業務を通して利用者と会話をし、つなげることに力を入れている。
- ・ 吉祥寺南町コミセンに関わっている。吉祥寺南町コミセンでは、29回の文化祭を開催しているが、運営委員に新たな人を迎え入れたことをきっかけに、利用している団体が中心となって文化祭を開催してもらおう試みを実施するなど、団体間の横のつながりをつくらうとしている。

■委員

- ・ 7年間かけてようやくコミセン設立を実現させた。その間、他のコミセンを見て回り、運営方法について検討を重ねたことで、運営前から1つのコミュニティができていたように思う。その中で、規則をあまり多くつukらない、新規参加者を大切にす、1人1人の意見を尊重する、オープンな雰囲気大切にすといった基本方針を固めてスタートした。
- ・ 運営委員についても既存のメンバーが「新たな人を連れて来よう」という話し合いでオープンさを確保してきた。
- ・ イベントについてもやりたい人がやりたいことに携わるというスタンスで臨んでおり、そのため非常にエネルギッシュな活動の源泉となっている。一方で、最近では窓口手当に魅力を感じ入ってくるような人もおり、多少、形骸化している側面もある。

■副委員長

- ・ 前会長が7年従事し硬直化していたタイミングで桜堤コミセンの会長となった。八幡町コミセンのようなドラスティックな変化ではないが、徐々に変えつつある。
- ・ コミュニティは良い人間関係をつくるのが基本である。変えることもチャレンジすることも重要だが、根本的には地域のすべての人と良い人間関係を築いていくということが非常に重要である。このため、ドラスティックな変化よりも、時間をかけて緩やかな変化の方針を持って変えていくことが重要だろうと考えている。
- ・ 現代において、コミュニティは普段関心を持たれないが、いざというときには頼れる関係がほしいということがコミュニティに求められているとすると、そのためにコミセンがどのような関係を構築すべきかを検討することが重要である。

■委員

- ・ 関前コミセンに関わっており、先週利用者懇談会を開催したが、参加者も少なく、意見も出てこない。傍聴者意見にもあるように、行事の開催もさることながら、他団体との連絡業務や連携共催等の仕掛けが必要だろうと感じている。

- ・御殿山コミセンでも、卓球の利用制限がないことで遠方からの利用者が多くを占める状況等がみられたが、制約すべきことは制約すべきだろうと考えている。
- ・いずれにしてもコミセンは地域のセンターであるべきだろう。

■委員長

- ・重要なことは、コミセンの運営はゴールではなく、手段でありきっかけでしかないということである。コミセンを1つの場としつつ、地域で活動する様々な団体が、お互いに関係を維持しているという地域のあり方の中心になりたいと考える人が、協議会活動に参加してきたという実態があるのだと思う。
- ・運営委員レベルではその考えは共有されているかもしれないが、外部には必ずしも共有されておらず否定的な意見もあるだろう。運営委員の現状については既に意見が出たので、今後の方向性について、自由にご意見をいただきたいと思う。

■副委員長

- ・他の委員が指摘された横のつながりについて協議できる場と、コミセンを通して地域について考える場が最終的に1つとなるとしても、その移行の段階では1つである必要はなく、そうした場はいくつもあっていいだろう。
- ・各団体はそれぞれの中での制約等もあり、他団体との交流ということが想定されていない場合もある。そうした団体は地域コミュニティに貢献することも想定していないケースが多い。その場合、場を設けても十分に機能しない可能性もあることについて検討してはどうか。

■委員長

- ・今のご指摘は、具体的には次回委員会のテーマとして深めたいと思う。

■委員

- ・コミュニティを広げていくときの工夫として、「コミュニティを考える人」と「考えてもらう人」という意識の差があるようでは成立せず、1つのハードルと考えている。運営委員ではなくても参加できる部分や、1日窓口体験等で参加者を増やすことで、ハードルを越えていくことが必要だろうと思う。

■副委員長

- ・かつて、中学生の職場体験のメニューとしてコミセンの窓口業務があった。このように、子どもを通じてその両親へコミセンのことが伝わっていくということも考えられるだろう。

■委員

- ・コミセンには、仕掛ける人やコミセンに入ってもらえる様な人がどこかにいないかなどのアンテナを張っている人が必要である。地域のために地域の情報を集めて動ける人の存在が必要だろうと思う。

■委員

- ・最初にコミセンに立ち入った際、何となく入りにくさを感じた。
- ・利用実績も出ているが、実質的には同じ人が複数回利用しているケースも多い。そうではなく実質的に利用している人が何人かということの方が重要であり、その総数を増やしていくことが必要だろう。イベント開催もさることながら、イベント形式にこだわらず気軽に人を呼び込めるような仕掛けが必要だと思う。

■副委員長

- ・コミセン設立時にも同様の指摘があった。協議会としては積極的に利用してもらうため、コミセン主催の様々な同好会を多数開催した。また、市民を通じて呼びかけを行い、間口を広げた。まずコミセンに行くきっかけをつくることで、コミセンで何ができるかを知ってもらうことでその後の継続的な利用につなげる仕掛けは、市としても実施している。むしろその周知がうまく機能していないのではないかと思う。
- ・子ども家庭課が実施している「親子ひろば」も、まずはきっかけとしてコミセンを利用してもらうという位置づけになっている。

■委員長

- ・こうした状況の中で、コミュニティ協議会が何をすべきか、またそのうえでの課題について意見を出していただきたい。

■委員

- ・コミセンの多様性は認識したが、その多様性を強調するあまり必要な共通点がみいだせない。
- ・コミュニティは、継続性と多様性の両方が必要である。多様な人が入って来られる状況づくりは必要であるが、「入ってきてください」としてしまうと入りたい人しか入らず、ある意味で強制的に参加させる仕組みが必要である。その1つとしては、「当て職」ということも意味があると思う。
- ・継続性と多様性を維持するには、不特定多数を狙う仕組みと、システムとして継続的に人を呼び込む仕組みの両方が必要である。その呼び込みの方法は各コミセンで違いがあっても良いと思うが、その仕組みにコミュニティ協議会がどのように貢献するかが重要になると思われる。

■委員

- ・市民のコミセンへの参加意向はわからないが、何かしらコミセンと関わる機会が生じた際に、コミセンの対応が悪ければその後関わりたいと思ってもらうことは難しい。一見で訪れる人々にもまた利用したいと思ってもらえるような環境づくりは重要だろうと思うし、そのことを心がけている。
- ・コミセンも、地域の人々にわかってもらえるような努力が必要だろうと思う。

■副委員長

- ・コミセンは当初と比較すると随分変わった印象がある。
- ・けやきコミセンは、当初非常に新しい取組みが注目され視察も多かったが、そうした「意見が反映されやすい」という良さが他のコミセンに伝播していったという側面もある。
- ・今はこうした状況を評価する時期に来ており、それはコミュニティ研究連絡会の役割と感じている。
- ・また、八幡町コミセンの取組みも他コミセンに伝播すると良いと感じている。

■委員

- ・定年退職した際、行政サービスを最大限利用し、お金のかからない生活を送ろうと考えた。その一環で、生活サービスとして無料で提供される市の資料を取り寄せようとするだけで市役所まで出向かなければならない（私は南町の端に住んでいる）という。それなら身近にあるコミセンを市民生活に役立つ情報の提供場所としたらどうかと考えたことがコミセンの運営委員に携わる一つのきっかけである。
- ・市政センターで受け取ることができるものもあるが、コミセンでも提供可能なものはいろいろとあると思う。市民が等しく恩恵を受けられるサービスがコミセンにあれば、もっとコミセンの認知度は上がり、地域に役立つコミセンになると思っている。
- ・また、コミセンでは道を尋ねられることが多いため、わかりやすい地図を置いた方が良いと考えている。行政の出先機関という位置づけではないが、こうしたことを端緒に市民とつながるツールとして活用できる可能性があると感じている。

■委員長

- ・今のご指摘は、行政との役割分担について考える上で非常に重要である。
- ・「自主三原則」を標榜したために行政とは異なるものとして扱われてきたが、今の時代に改めてそれで良いかという議論は重要だろう。

■副委員長

- ・コミセンには多様な資料があるが、その情報が市民に届いていないのが実情であり、課題と考えている。

■委員長

- ・他の活動団体が、何かをコミセンに置いておくということも考えられるし、そういう場であるべきだろうと思う。
- ・次回以降のコミュニティセンターの位置づけということにもつながると思う。コミセンがいろんな人が集う空間であるということは非常に重要だろうと思う。

■事務局

- ・行政の立場からみると、コミセンを通じて情報提供してほしいチラシは毎月大量に配布している。コミュニティ研究連絡会からは、行政の要請が過多になりすぎるという懸念と、供給過多で置き場所に困るという意見を聞いている。

■委員

- ・確かに個別のチラシ量は非常に多いが、市民の生活に直結する資料や情報はあまりない。その情報こそが必要であると思う。

■委員長

- ・行政側からは行政が知らせたい情報が届くが、市民目線からすると必ずしも欲しいと思っている情報ではなく、両者のニーズがマッチしていないということだろう。
- ・コミュニティ活動を行っていく上で、有用な情報を行政と連携して取得していくということが重要になるのではないかと思う。

■委員

- ・コミュニティ協議会の問題についてはどのように共有されているのだろうか。
- ・コミセンが抱える問題の多様化等について、意見交換をしたりする場はあるのだろうか。またそれに関連して協議会として主体的に解決しようとする姿勢はあるのか。

■委員長

- ・コミュニティ研究連絡会というものがコミセン間の意見・情報交換の場であり、行政からの連絡等を各コミセンに伝達する場となっている。副委員長はその代表である。

■委員

- ・問題が多様化している現状について、共有したり対応策をとっていかうという動きにならないのか。

■副委員長

- ・共通問題としては施設運営が課題となっている。コミュニティづくりについては、各コミセンがそれぞれに自主性をもって対応している状況であり、その内容や詳細については共有されていない。
- ・また、コミセンやコミュニティ協議会がコミュニティづくりを行う組織であることの意識啓発と新たな人的リソースを呼び込むための工夫等については、別に部会を設けて検討している。

■委員

- ・そうした検討の場があるのであれば、そこで解決できると思うが、それでもなお本委員会で課題として上がってくるということは、コミュニティ研究連絡会では解決できないということなのだろうか。

■副委員長

- ・人をどう呼び込むかは永遠の課題である。
- ・来ない人をどのように来させるかは、非常に苦勞する点であり、様々な工夫・検討がされる中で、2年前にはコミセンをカフェ的に利用してもらおうというアイデアも出された。

■委員

- ・コミュニティ研究連絡会では、行政の報告や依頼等が多くなり、コミセンの問題を話し合う時間がないという状況になっていたが、一昨年から、各コミセンが抱えている課題を議題として提案し、他のコミセンが取組みを報告して検討している。

■委員長

- ・コミュニティ研究連絡会の部会で「コミュニティのあり方懇談会部会」がある。
- ・しかし、自主参加を基本とする市民コミュニティ組織にそこまで求めるのは難しいと思う。何かしらのかたちで行政が入って関係を持つということはあるだろう。

■委員

- ・最近問題になっていることがなにかについて共有できると理解が進むのだが、可能だろうか。

■副委員長

- ・管理運営のあり方は問題になりやすく、大きな問題として存在している。また、利用のあり方についても対応に苦慮している。
- ・「営利」と「非営利」の線引きについても難しく、提案された課題の検討を契機として、多くのコミセン従事者に広く考えてもらうことが重要と考えている。

■委員長

- ・本日の議論について振り返りまとめてみたい。
- ・コミュニティがいったい何であるのかということ、特定の地域の中で情報を収集し、地域で起きていることを共有し、なるべく多くの人に関わりたい形に関わったり、組織したり、人と人をつなぐといった営みを絶えず実施していくということがコミュニティのあり方であると思っている。
- ・市民1人1人の生活という視点からすると、地域との関わりは生活の一部でしかない。人によっては人生のほとんどにおいてほぼ関わらないこともある等、関わりの濃淡が違って、関わりたいと思ったときにスムーズに入っていけるような仕組みこそがコミュニティのあるべき姿だと考えている。
- ・協議会が果たしてきた役割についての共通認識として、コミセンの管理を踏まえつつ、地域に目配りしながら色々な仕掛けを用意する工夫をしてきたという点が挙げられるだろう。
- ・これまでは「自主三原則」に則ってコミセンに一任する形式や、コミセン間での情報共有にとどまってきたが、コミュニティのあるべき姿を実現していくためには、自主三原則だけでは難しい部分も多いことが明らかとなってきた。こうしたことを踏まえ、次回以降の委員会では、今後のあり方として、コミセンがどのような役割を担うべきか、目的別コミュニティである各団体はコミセンを通じてどのように関わるのがよいか、またこれまで行政が関与してこなかった部分に、災害時対応も含め行政がどのように関わり支援できるのかといった点について議論して頂くこととなる。

- ・議論を通じて、コミュニティは様々な人に開かれたものであるべきで、これまでもそのことを意識し、そうあろうと努力を重ねてきたことは共有された。
- ・本日の議論ではあまり意見が出なかったが、視察を通じても明らかとなったとおり、地域ごとにコミュニティのあり方は多様である。個々の地域の実情にあわせて様々な工夫を重ねてきたことは、「自主三原則」に基づくあり方として非常に評価すべきであり、武蔵野市にとっても偉大な財産であると考えている。
- ・地域がこれからも地域らしさを維持していくためには、一律にこうすべきといった方法をとるのではなく、その方法は地域で独自に見つけるべきで、そのためにはコミセンは必要な組織であると考えている。

3. その他

(1) コミュニティセンター管理運営委託費・活動補助金について

(資料3の説明)

(委員より追加資料の説明)

(2) 次回日程調整について

- ・平成25年11月19日(火)午後6時30分より開催する。

以上